

大学と地域で創る生涯学習活動の研究：後志地方におけるワークショップによる地域共同活動の試み (1)

著者	藤原 等, 高岡 朋子, 菊地 達夫, 酒井 宏三, 中村 康子, 本間 美幸, 佐藤 至英, 佐々木 邦子, 森 一生, 阿部 典英, 末岡 一伯, 岡元 眞理子, 野崎 嘉男, 林 亨, 村井 俊博, 北村 優明, 沓澤 隆, 中出 佳操, 千葉 圭説, 田口 智子
雑誌名	生涯学習研究と実践：浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要
巻	10
ページ	33-60
発行年	2007
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00002238/

大学と地域で創る生涯学習活動の研究

—後志地方におけるワークショップによる地域共同活動の試み（1）—

A Study on Lifelong Learning Activities

Jointly Organized by a University and a Community

—A Case Study of Regional Collaboration through Workshops

in the Shiribeshi District (1) —

藤原 等高岡 朋子 菊地 達夫 酒井 宏三 他*
FUJIWARA, Hitoshi TAKAOKA, Tomoko KIKUCHI, Tatsuo SAKAI, Khozou et al.

I. はじめに

本研究は、4部構成となっている。その第1部である本稿では、本研究の研究計画（構想）と、それに関する予備調査結果についてふれることにする。なお、原研究計画（構想）が順次微修正されながら第5次修正版に至ったことを記しておく。本稿は、第5次修正版（2005年、平成17年8月2日）に基づいて執筆されている。本稿の位置付けは総論的な序論となる。

II. 本研究研究計画の時系列的な修正経過

1. 平成17年（2005年）4月20日 本研究の研究計画（構想）起案
2. 平成17年4月21日 本研究所第3回運営委員会で決定
3. 平成17年5月10日 本学特別研究費審査・評価委員会で本研究が採択決定
4. 平成17年5月17日 第1次修正版起案
5. 平成17年5月24日 本研究所第4回運営委修正決定
6. 平成17年5月24日 第2次修正版起案
7. 平成17年5月31日 所長の現地訪問打合わせを経て第3次修正版起案
8. 平成17年5月31日 本研究実務責任者3役会議を経て本研究所第4次修正版決定
9. 平成17年8月2日 本研究所第7回運営委決定を経て第5次修正版決定

*本研究は表記の4名の他、次に掲げるメンバーによる共同研究である。中村康子・本間美幸・佐藤至英・佐々木邦子・森一生・阿部典英・末岡一伯・岡元真理子・野崎嘉男・林亨・村井俊博・北村優明・沓澤隆・中出佳操・千葉圭説・田口智子。所属は、すべて浅井学園大学生涯学習研究所所員である。

Ⅲ. 研究計画（構想）の概要

1. 申請者 浅井学園大学生涯学習研究所
2. 申請代表者 所長 藤原 等
3. 実務責任者：実行委員長 高岡朋子、実行副委員長 菊地達夫、事務局長 酒井宏三、
4. 研究推進係 高岡朋子・菊地達夫・酒井宏三・中村康子・本間美幸・(藤原 等)
5. 研究員 藤原等・高岡朋子・菊地達夫・酒井宏三・中村康子・本間美幸・佐藤至英・佐々木邦子・森一生（以上、研究所運営委員・研究所所員）、阿部典英・末岡一伯・岡元真理子・野崎嘉男・林亨・村井俊博・北村優明・沓澤隆・中出佳操・千葉圭説・田口智子（以上、研究所所員）。

6. 研究テーマ

正式 主題 大学と地域で創る生涯学習活動の研究

正式 副題 後志地方におけるワークショップによる地域共同活動の試み

- ①所長が、平成17年（2005年）5月26日～27日、現地、倶知安町を訪問し、また足を延ばして共和町、ニセコ町を訪問し、総合的に判断し、次のように提案する。美術館・博物館を中心にした文化活動やアウトドアスポーツなどの健康運動活動の振興、温泉・ホテル・ペンション等を含めた観光・旅行的な活動、農業・漁業等の振興及び地場産品の地産地消活動等を含む商店街の振興などを広範囲に、可能な限り調査活動等を含めた上で本研究でのワークショップになると考えられるので「地域活性化」という表現ではなくて「地域活動創造」という用語を使用することを提案した。その後6月1日開催の実務責任者の3役会議で協議・検討した結果、主題の文言も含めて整理し、副題には「地域共同活動」という用語を使用することでまとめ決定した。

第3次案 主題 大学と地域で共に創る生涯学習活動の研究

第3次案 副題 後志地方におけるワークショップによる地域活動創造の試み

↑

第2次案 主題 大学が地域で共に創る生涯学習活動の研究

第2次案 副題 後志地方におけるワークショップによる地域活性化の試み

↑

第1次案 主題 高等教育機関として生涯学習活動を通じた地域活性化支援の研究

第1次案 副題 後志地方におけるワークショップを通じた地域活性化支援の試み

- ②「後志地方」とは、当面、倶知安町を考えている（後志地方には広範な市町村が存在するわけであるから、1町に限ることなく、少なくとも後志ミュージアム・ロードに関係する町村を対象とするべきところではあるが、本研究所として最初の地域共同研究であること等を勘案して倶知安町にしぼることになった。）

（5月27日開催の所内実務責任者の会議で倶知安町一個所にしぼることになった。）

- ③倶知安町の受け入れを打診し概要説明のために、所長の藤原が5月26日～27日現地を訪問した（同時に、共和町の西村美術館、ニセコ町の有島記念館を訪問し最近の両館の活動状況や来館者数等について話を聞いた。）。小川原記念美術館・倶知安風土館（博物館）・公民館の責任者（3館の館長は社会教育課課長が兼務）及び社会教育課の課長、主幹、係と話し合い理解を得ることができた。
- ④その後町長（首長部局）・教育長と会うための日程調整を依頼していたところ6月8日～9日ということになり、所長が倶知安町を訪問することになった。合わせて、中心になるであろう社会教育課並びに美術館長と細部にわたる打ち合わせをする。
- ⑤所長が町長、教育長と会い正式のあいさつと依頼をした後、本研究所の3人の実務責任者と研究推進係、研究員が順次、あいさつと打ち合わせのため現地入りすることになる。
実は、ミュージアムロードの各館をまだ見たことのない研究員が多いのである。
- ⑥また状況を見ながら後志教育局長（道教育委員会、道教育庁）、各学校長、PTA関係者、商店街の関係者等に会わなければならないと思われる。
（6月30日～7月2日、所長現地に入り、ワークショップ開催に際して、参加してくれるように各界各層の実務的な活動家に面会し要請した。しかしながら、ワークショップの実質参加者を得る活動は、現地の社会教育課長始め担当者にお世話になることだけは間違いないところである。合わせて、所長は、研究員のために現地を理解するための各種資料の収集をおこなった。資料は研究員個人に渡すよう十分部数を揃えた。）
- ⑦7月13日、14日、3人の実務責任者（高岡朋子、菊地達夫、酒井宏三）倶知安町に入る。
矢吹俊男社会教育課長と面談し、ワークショップ開催の第1回目の具体的打ち合わせをする（小川原記念美術館にて）。課長が大変多忙なために日程調整がうまくいかなかった。
- ⑧7月26日（火）、前学期末の多忙を極める中、学内会議室でワークショップ担当者に対する打ち合わせ会議を開催する。

7. 本研究の背景

(1) 今日、住み慣れた地域の中で、健康で安心して生きがいをもって暮らすことができるよう、地域に強い誇りと愛着をもって、さまざまな地域活動に積極的に参加し、安らぎと個性ある地域造りを進めることが求められている。このような現状認識のもとに「第2次北海道生涯学習推進基本構想」が2005年（平成17年2月）、北海道生涯学習推進本部（本部長 北海道知事高橋はるみ）によって策定された。

(2) この「基本構想」は、道民一人ひとりが生涯学習の成果を活かし、個性あふれる地域づくりに参画し、北海道全体を自信と活力に満ちた大地として再生させ、「住んでいることを誇りに思える、夢のある北海道」の創造を進めようというものである。

(3) しかしながら、北海道経済は長い低迷状態から抜け出すことができないばかりか、市町村合併等いわゆる三位一体の構造改革により、思いのほか地域間格差がますます増大する方向にある。北海道スタンダードの一つである「北海道生涯学習ネットワークカレッジ（略称：道

民カレッジ)」を例に取り紹介する。「道民カレッジ」連携講座の地域管内別参加団体・講座数は平成17年2月22日現在次のようになっている（道民カレッジ事務局の資料）。

表1. 「道民カレッジ」連携講座の地域管内別参加団体・講座数（H17.2.22現在）

	団体数	講座数		団体数	講座数		団体数	講座数
石狩	90	310	上川	11	18	日高	4	10
渡島	11	18	留萌	1	2	十勝	5	6
檜山	0	0	宗谷	2	3	釧路	9	14
後志	3	3	網走	17	22	根室	2	5
空知	10	43	胆振	11	13	合計	175	466

このように道央圏に一極集中の様相が見られ地域間格差が拡大している。本学を中心に自動車約2時間強の距離圏の中で見れば、例えば後志地方の落ち込みが激しくなっている。

(4) 「第2次基本構想」の中で、「北海道らしい生涯学習社会の実現へ向けての基本的方策」として、「家庭教育の充実」「学校教育の充実」「社会教育の充実」「職業教育及び職業能力の向上」について具体的に述べている。一方、本研究所では、これまで、青少年向けの生涯学習啓発事業、ニュースレターを通して地域の生涯学習活動の取組紹介、研究紀要で地域活性化の実践者の論文掲載、生涯学習叢書を通して所員の地域活性化やその基礎的・理論的研究を紹介してきた。これらの営みは、北海道に位置する高等教育機関として生涯学習行政と協力共同し、北海道の、日本の生涯学習社会を構築するための先進的な取組みの1つであったとも言える。高等教育機関は行政機関ではないが協力共同できるところは最大限協力し、元気ある北海道づくりに寄与できるものと確信している。特に、本研究所の研究は実践と切っても切り離せない実践的な学問を追究しなければならないことだけは明白である。地域の子どもたちにも生涯学習へ参加する機会を拡大する必要があるから高等教育機関としての本研究所が実施している青少年向け生涯学習啓発活動は極めて意義深く重要である。

(5) また2004年（平成16年10月）には「北海道子ども未来づくり条例（正式名称：北海道子どもの未来づくりのための少子化対策推進条例）」が制定されている。これは夢や希望あふれる北海道の子どもたちの未来のために制定されたものである。この面でも地域間格差が増大しては困るのである。地域の子どもたちにも生涯学習へ参加する機会を拡大する必要があるから高等教育機関としての本研究所が実施している青少年向け生涯学習啓発活動とその目的は一致している。

(6) 更に後志地方には通称「ミュージアムロード」という他の地区には見られない特色がある。岩内町の荒井記念美術館・木田金次郎美術館、共和町の西村計雄記念美術館、倶知安町の小川原脩記念美術館と倶知安風土館（博物館）、ニセコ町の有島武郎記念文学館、真狩村の国松登ギャラリー（閉鎖中）、喜茂別町には中山峠森の美術館（アール・ヌーボーコレクション

と写真家嶋田忠ネイチャーアートフォーラム：閉鎖中) など、この地域には美術館・博物館・文学館が集積しているのである。これらの地域には、すぐれた作家を生み出すことのできた豊かな自然風土が存在しそれは地域に密着したものとなっている(なっていた)。これら「ミュージアムロード」などの文化的、生涯学習施設の過去から現在までを分析検討する中で21世紀の生涯学習施設として再活性化させ、活用を図る新しい生涯学習計画が必要とされていると考える。このようなことに本研究所が些少な範囲ではあるが寄与できるのではないかと思う。人と人とを結び合う生涯学習計画の策定が期待されているわけである。

(7) 最近、「地域活性化」という用語が、必ずしも地域に住んでいる人々の側から見て適切な表現ではないかもしれないという疑問が出されている。地域住民の側から見れば、中央政府や行政、あるいは大学や研究機関が地域活性化という用語を使用する時、「何か地域を活性化してやる」というニュアンスが含まれているというのである。例えば、補助金等の予算が獲得されている期間だけは「地域活性化」だと騒いでいるが、予算が打ち切りになると、「あなたたち、地域が自分たちの力で生き残っていきなさい。」とばかりに、それまで関係した「地域」のことをあまり言わなくなったりするというのだ。そして、少しの時を経てまた、別の地域に行って、「地域活性化」であると声を大きくして言い始めるというのである。こういう声に接して妙に納得させられるのである。新しい学習をさせてもらったと考えている。

このようなことから、本研究においても、当初副題に、「地域活性化」という用語を使用していたが、検討した結果、少なくとも、本研究においては、「地域活性化」ではなくて、本研究所と地域が共同して「地域活動の創造を試みる」という意味合いから、「地域共同活動」という用語を用い表現することにした。このことに連動して、主題の文言から「共に」という用語を削除し整理して、主題と副題全体の統一性を図った。

8. 研究の目的

上の背景を受けて、北海道では、生涯学習分野においても最近、ますます地域間格差が拡大してきている現状を認識し明確に意識する。そこで比較的、本学から近距離圏にある後志地方(しりべし ちほう)に焦点をしばって(具体的には当面その代表的地域として倶知安町に的をしばって)、ワークショップを通じた地域活動創造支援事業を研究活動として展開し、高等教育機関として生涯学習活動を通じた地域共同活動創出支援の実践的研究を試みることを研究の目的とする。

9. 研究計画

(1) 後志地方の中核都市である倶知安町を起点にして生涯学習支援を、町、町教育委員会、後志支庁(北海道庁)、北海道教育委員会後志地方教育局、小・中・高等学校、同PTAや町内会、商工等関係団体、美術館、博物館等諸団体と連携し、本学生涯学習研究所としてワークショップ方式の地域共同活動を生涯学習支援として地域住民と協動的に実施する。特に、次のことを強く配慮する。ともすると、これまで大学が一方的に地域を支援するということが比較的多く見られたが、大学は、地域から学ばせてもらうのであり、大学と地域が共に生涯学習活動

を創造していくという立場を鮮明にする必要がある。結果として、地域共同活動展開の役に立てれば大学として意義があったと評価するという立場を忘れないようにすることである。そんなことから上記6、の「研究テーマ」の主題、副題を設定したのである。

(2) ワークショップの種類(仮)と対象

- ①造形分野(子ども向け、大人向け、親子向け)
- ②絵画分野(子ども向け、大人向け、親子向け)
- ③歌唱分野(子ども向け、大人向け、親子向け) どちらかといえば、童謡や歌曲、クラシック的な分野、大きな声で歌うことは健康の源である。
- ④歌唱分野(子ども向け、大人向け、親子向け) どちらかといえば、親子で歌おう、ファミリーコーラスのおすすめ分野。アコーディオン伴奏。歌声喫茶なども。
- ⑤管楽器分野(親子向け) みんなで楽器にさわり、音を出してみよう。
- ⑥演劇分野(子ども向け、大人向け、親子向け) 朗読・朗読劇から劇作りへ
- ⑦はたらく意欲づくり分野(ニートなどの問題を含めて、家庭から働く意欲を高める)
(子ども向け、大人向け、親子向け)
- ⑧経営学分野(子ども向け、大人向け、親子向け) マネージメントゲームを使って。参加者個々人が社長になって会社経営をしてみる。自分の会社を発展させるためにはどのようにすれば良いのか。自分の会社を倒産から救うにはどのようにすれば良いのか。さあどうする。マネージメントゲームを使用しながら経営とは何かを学習し、経営感覚をみがく。起業のきっかけにもなる。子どもの時から経営感覚を研くことは一つの未来志向につながる。
- ⑨スポーツ分野(子ども向け、大人向け、親子向け) 具体的には今の所バドミントンを考えている。バドミントンを通して健康作りに寄与する。
- ⑩子育て支援分野(大人向け) 幼稚園・保育所の統合的一体化による幼児教育の今日的問題について、座談会等を通して語り合い、地域特性や課題を見だし、課題解決の一助とする。
- ⑪あたらしい教育分野(大人向け) 障害児教育から特別支援教育へ。心の教育のこと。学力のこと。生涯学習のこと。社会教育のこと等々。
- ⑫青少年とたばこの問題、健康学習の分野(子ども向け、大人向け、親子向け)
注. 小学、中学、高校生に対する啓発活動を重視する。
- ⑬青少年の職場体験学習(インターンシップ)について考える分野
(体験する側=子ども向け、受入側=大人向け、送出し側・家庭側=親子向け)

表2. ワークショップの開催日時と場所、対象者の決定
(上記メニューから現地ニーズに応じて検討する)

ワークショップ名	開催日時	対象者	予定人数	場所
	・第1希望 ・第2希望			
	・第1希望 ・第2希望			

(3) 成果報告

①ワークショップを通しての実践活動と、後志地方における生涯学習推進方策に関する調査等の研究成果を、本研究所の研究紀要や生涯学習叢書、ニューズレター等に発表し公表する。

②研究成果報告書を作成する。

報告書の内容は4部構成とする。現時点では、本研究所の「研究紀要」又は本学生涯学習システム学部の「研究紀要」にそれぞれ16頁立ての論文として発表する予定である。研究成果報告書は、この4論文の別刷りを合本して新たな表紙を被せることにする。現時点での発行部数は未定であるが、現地倶知安町を中心とする後志地方の各市町村と本学内、学外に配布を予定している。作成部数は300部～500部の範囲ではないかと考えている。3役（3人の実務責任者）会議で至急検討する。(結果的に、ワークショップ開催の日程が11月から12月になったので平成17年度内発行の上記2つの「研究紀要」に発表することが困難になり、別建てで報告書を作成することになった。)

(1)大学と地域で創る生涯学習活動の研究－後志地方におけるワークショップによる地域共同活動の試み－(1) (総論) 執筆者 藤原 等 (藤原を筆頭執筆者として、20名の研究員の連名論文として発表)

(2)大学と地域で創る生涯学習活動の研究－後志地方におけるワークショップによる地域共同活動の試み－(2) (各論1－平成17年7月の時点では、若年者に視点をおいた論文になる予定－) 執筆者 酒井宏三 (酒井を筆頭執筆者として、20名の研究員の連名論文として発表)

(3)大学と地域で創る生涯学習活動の研究－後志地方におけるワークショップによる地域共同活動の試み－(3) (各論2－平成17年7月の時点では、ワークショップに視点をおいた論文になる予定－) 執筆者 高岡朋子 (高岡を筆頭執筆者として20名の研究員の連名論文として発表)

(4)大学と地域で創る生涯学習活動の研究－後志地方におけるワークショップによる地域共同活動の試み－(4) (まとめ－平成17年7月の時点では、上記総論を受けて、ワークショップやそのほかの調査結果にもふれた、本研究全体のまとめになる論文となる予定－) 執筆者 菊地達夫 (菊地を筆頭執筆者として、20名の研究員の連名論文として発表)

このことについては平成17年7月11日の3役会議を経て同年7月12日の第6回本研究所運営

委員会で決定済みである。なお上記論文の(2)(3)(4)の内容については今後変化することがある。ただし(1)の論文が総論で、(4)の論文がまとめであること、並びに(2)(3)の論文が各論であることには変化がない。また(4)の論文が場合によっては各論的になることもあり得るものとする。

(4) 研究の評価

自己評価とともに、可能な限り、第三者評価を実施し、評価結果についても公表する。

(5) 研究員の拡大について

本研究所は豊富で多彩な研究分野の研究所員、研究員を有しているので今日まで積極的に本研究への参加を呼びかけてきた。この参加呼びかけの手続きを経て平成17年5月31日をもって募集を締め切り、本研究上の研究員を確定をした。なお、その後、田口智子所員から強く参加したい旨の要請を受けたので、平成17年7月12日開催の第6回本研究所運営委員会の議を経て本研究の研究員として参加してもらうことになった（担当ワークショップは「インターンシップ」の分野）。今後とも、本研究への参加希望者があれば上記と同様の手続きを経て研究員として参加してもらうことにする。恒に、本研究所の姿勢は開かれたものであることを示しておきたい。生涯学習研究における姿勢はオープンであることが必要である。

(6) 時系列的な研究計画のまとめ

- | | | |
|--------|---------|--|
| ①研究準備期 | 平成17年4月 | 研究費の申請と研究内容の細部検討 |
| ②第1研究期 | 同年5月～6月 | 事業規模と詳細案、研究計画細案の検討と確定
開催町村との折衝・打ち合わせ |
| ③第2研究期 | 同年7月～8月 | 開催プログラムの広報、宣伝、現地打ち合わせ
ワークショップ実施者を含めた現地打ち合わせ |

↓↓↓↓↓

修正 (05.8.2).

- | | | |
|--------|----------------------|--|
| ③第2研究期 | 同年7月～
<u>9月上旬</u> | 開催プログラムの広報、宣伝、現地打ち合わせ
ワークショップ実施者を含めた現地打ち合わせ |
|--------|----------------------|--|

- | | | |
|--------|----------|---------------------------------------|
| ④第3研究期 | 同年8月～10月 | 現地でのワークショップ、調査の実施
中間発表会（学内または研究所内） |
|--------|----------|---------------------------------------|

↓↓↓↓↓

修正 (05.8.2).

- | | | |
|--------|-------------------------|---------------------------------------|
| ④第3研究期 | 同年9月中旬～
<u>11月中旬</u> | 現地でのワークショップ、調査の実施
中間発表会（学内または研究所内） |
|--------|-------------------------|---------------------------------------|

- | | | |
|--------|-----------|--------------------|
| ⑤第4研究期 | 同年11月～12月 | 現地での反省会、各所にお礼とあいさつ |
|--------|-----------|--------------------|

↓↓↓↓↓

修正 (05.8.2).

⑤第4研究期 同年11月下旬～
12月中旬 現地での反省会、各所にお礼とあいさつ（3役の挨拶は実際には平成18年1月、所長の締めくくりの最終挨拶は平成18年3月27日から29日になった。）

⑥第5研究期 平成18年1～2月 研究成果のまとめ

↓ ↓ ↓ ↓ ↓

修正 (05.8.2).

⑥第5研究期 平成17年11月下旬～
平成18年1月 研究成果のまとめ（論文化）
実際には、ワークショップ開催の大幅な遅れから平成18年3月になってしまった。

⑦第6研究期（発表と評価） 平成18年3月

研究成果の口頭発表会（学外にも公開）自己評価と第3者外部評価（可能にしたい）

現地ワークショップ開催と反省等の大幅な遅延のため平成18年3月現在開催の見通しがつかないまま経過している。

⑧研究終期 平成18年4月～平成19年3月 18年度刊行予定の本研究所「研究紀要」、
「生涯学習叢書」に論文執筆、「ニューズレター」にも成果報告を掲載する。しかし、実際には、上記の理由からこの3つに掲載する機会を失ってしまった。

なお、4本の論文並びに研究成果報告書を平成18年3月までに完成させるかどうかについては平成17年7月時点で未定であるが、年度内処理がよいという声もあり、3役会議と所長で結論を得て直近の本研究所運営委員会で決定してはどうか（その後、報告書を紀要等の抜き刷りの合本ではなく別建てで年度内処理をすることになった。）。

10. 研究費の確定

特別研究費、合計200万円。

11. 本研究の今後の見通し並びに本研究所の他の業務との関連（順不同）

- (1) 明年度以降、後志地方での継続研究が見込まれる。現地ニーズの確認をする。
- (2) 道内の生涯学習地域間格差の大きな地方、例えば檜山、留萌、宗谷、日高、十勝、根室などを開拓する必要性も出てくる。現地ニーズの確認をする。
- (3) したがって、新たに研究費の確保が必要である。
- (4) 今年度の「青少年生涯学習啓発事業」は、本研究に含めることにする。本研究のワークショップがかなりの部分、親子、又は子どもから大人までの異世代混合の参加者で実施される

見通しがついたので「青少年生涯学習啓発事業」を単独で実施する意味が薄れたことによる。

(5) 倶知安町長、同教育長に対する所長の依頼が終了した時点で、本研究は実践段階に移行する。3名の実務責任者、研究推進係の段階に移行する。また、研究員レベルでの会議や現地打ち合せなども必要であろう。

(6) 本研究は、地域に依拠する大学が、大学として果たすべき実践的地域研究の意味が大きく内包しているものであるから、十分なる思考のもとに柔軟に大胆に展開することが今後の展望を切り開くことにつながると考えられる。

本生涯学習研究所員と本研究の研究員、とりわけ本研究にかかわる全てのスタッフは、現地受入先のすべての人々と臨機応変、柔軟に対応し、協力し、楽しく、地域共同活動の創出を試みることを所長として強く願望している。大学が、フィールドを地域に移すことに対して、大いなる期待を表明しておく（しかし、現実には極めて厳しく、困難を呈した。それは、平成17年9月頃からマスコミが報道するようになった一連の本学園を巡る不祥事の影響であった。現地受入先のすべての皆さんに不愉快な感情と不信感を抱かせ、またワークショップを担当する研究員にも何とも言えぬむなしさと恥ずかしさを抱かせてしまった。地域実践研究にとっては、この種の不祥事は致命的である。恥ずかしさと無念さで所長として、個人的には再起不能かと思う時期もあった。幸いにして現地、倶知安町の皆さんの大きな包容力のある心によって、延べ人数、429名の参加者を得て、この活動は町始まって以来とも言える大成功で終結することができた。感激と感謝の気持ちで一杯である。)

(7) この後、本研究所内部としては、緻密で正確な「研究計画書」を立案しなければならないと思われる。ワークショップを成功させることは第1であるが、研究としてのプロセスを重視し、研究成果報告をどのように取り纏めるのかを常に想定しておかなければならないと思われる。生涯学習研究は、実践と研究（理論化）が一体となっている学問である。

(8) 各自が小さな声に耳を傾けながら、大胆に、全体を見ながら、夢を持って、楽しく、実践と研究の道を歩めれば良いと考えている。例え失敗があっても、それは次の糧になるのである。部分的な心配や失敗はつきものであり、全体を通して手応えを感じられれば成功である。

12. 研究成果報告（研究論文のデザイン。今後、詳細に加筆修正し成果報告論文を完成）させる。研究成果論文執筆の一例を示す。

I. 題目

主題 大学と地域で創る生涯学習活動の研究

副題 後志地方におけるワークショップによる地域共同活動の試み

II. 問題

1. 問題の所在

仮説はこの「問題の所在」に含めて考え記述する。

2. 研究目的

Ⅲ. 方法

1. 対象
2. 時期
3. 場所と材料（場所の選定、調査票と記録用紙・項目内容、ワークショップの説明と使用素材や用具・器機等の説明）
4. 研究手続
5. 研究方法

Ⅳ. 研究結果

1. 現地に関する文献研究の結果
2. 地域共同活動を試みる前段での基礎的調査の結果
3. 各ワークショップの内容等の全体と個別の計画（ワークショップ全担当者の計画を網羅する。）
4. 実際に現地で開催することができたワークショップの内容等の全体と個別の計画
5. 現地各ワークショップへの参加者の反応と各ワークショップ担当者の反応
6. 現地開催地の共同スタッフの感想等の評価結果
7. その他

Ⅴ. 結果の考察

- 1.

Ⅵ. まとめ（今後の展望）

1.
（最後に、謝辞）

Ⅶ. 注と文献（注、参考文献、引用文献）

1. 注
2. 参考文献
3. 引用文献

Ⅷ. 第3者外部評価のコメントのまとめ

1. 数量的な評価（例えば、10段階評定と平均値、標準偏差、最大値、最低値等）
2. 質的な評価（例えば、コメントのまとめ）
3. まとめ

13. 本研究は機関研究である。

機関研究の意味は、本研究所の業務として研究をすることである。研究分野の類似する者同志が集まって任意の研究グループを結成し研究することではない。異なる専門分野の所員が生涯学習研究所の所員として、仕事として生涯学習活動の研究を実施することである。機関研究の意味をしっかりとっておさえ直してもらいたい。

14. 共同研究の意味

本研究は共同研究である。その共同研究の意味は、本研究の研究者20名が共同して研究を実施するという意味であって、ワークショップの現地倶知安町と共同研究を行うという意味ではない。研究費のしほりから、本研究で現地と共同研究を行うとすれば、それぞれが研究費を50%負担しなければならないことになる。こういう意味から、「地域共同活動」と副題で表現しているわけである。「主催」は、浅井学園大学生涯学習研究所で「地域共同活動協力者」(「地域」、「地域共同活動」の文言をはずして、単純に「協力者」としても良いだろう)は、倶知安町という表現になる。

15. 研究員の役割

今後研究推進係以外の研究員にどの程度の役割を分担してもらうのかについても協議しなければならない。3役会議で原案を作成し、直近の本研究所運営委員会で協議する必要がある。

16. 現地ニーズの煮詰めの中で、どうしても、現地の人をこの共同研究のメンバーに組み入れたいという事態が発生した時には、その人に、本研究所の制度上の研究員登録をしてもらい、その研究員という位置付けで本研究の研究員になって戴くという方法が存在していることを記しておく。必要があれば手続きを執り行い本研究所運営委員会に付議することにする。

17. 本日までの期間において(平成17年7月)、倶知安町、蘭越町、共和町、ニセコ町のさまざまな機関や施設、個人から、数多くの参考資料を戴いたことを記し、感謝の意を表す。

IV. 予備調査——北海道で最も急激に変貌する可能性のある地域、なぜ、倶知安町を中心にしたニセコ・羊蹄山地区に着目したか

1. 予備調査について

(1) 本調査の主旨と目的

上記本研究計画構想を受けて、今後10~20年の時間的経過の中で見る時、北海道の中で最も急激に変貌する可能性を持っていて、刺激的でさえあるとも思える後志中央部地方(本調査では、「倶知安町を中心にしたニセコ・羊蹄山地区」を意味する)の諸課題を明らかにするための前段として、現時点での現状把握をする目的から、この地域に関する認知度の予備調査をおこなった。

(2) 本調査の方法

①方法：あらかじめ本研究所が用意をした質問項目並びに回答者の自由記述項目からなる質問紙による無記名アンケート。なお、調査用紙は本稿末に資料として添付した。②時期：2005年7月5日に個人毎に配布。7月12日午後6時に最終回収。③対象：T大学教員と職員計287名。④回収率：65.8%。⑤分析対象と比率：70歳代の回答者1名と男女別及び回答者の年齢世代について無記入者及び設問欄に一部無回答があった者12名を除く176名。対象者に対する分析比率61.3%。⑥分析手続き：世代別(男女別)集計分析をしたので上記⑤の70歳代の回答者1名と男女別及び回答者の年齢世代について無記入者12名については、回答に協力してもらっ

たが除外した。この計13名の回答者に対してこのことをことわり、協力を謝意を表す。対象の職場が大学という特殊な位置にあるので、本分析結果を一般化して「道央圏」地区の認知度の標本にするには慎重であらなければならないと考え、統計的分析をしないで単純比率をもって「この地区」の認知度を傾向として読解することにした。分析結果等では美術館等の名称は略記した。木田金次郎美術館（木田）、荒井記念美術館（荒井）、西村計雄記念美術館（西村）、小川原脩記念美術館（小川原）、有島記念館（有島）、倶知安風土館（博物館：風土）。

（3）予備調査の結果

表3. 年齢世代別・男女別からみた美術館・博物館に「行ったことがある」と回答した者の比率（%）（N=176）

世代 N	20代男 11	20代女 26	30代男 18	30代女 27	40代男 14	40代女 24	50代男 12	50代女 13	60代男 21	60代女 10	平均 176	順位
館名称												
木田	0%	4%	22%	7%	14%	17%	42%	15%	76%	70%	26.7%	②
荒井	0%	4%	6%	0%	14%	12%	33%	8%	71%	50%	19.8%	③
西村	0%	0%	0%	0%	7%	4%	8%	0%	38%	50%	10.7%	④
小川原	0%	4%	6%	0%	7%	0%	0%	0%	38%	10%	6.5%	⑤
有島	0%	12%	17%	15%	36%	25%	42%	38%	81%	70%	33.6%	①
風土	0%	8%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	5%	0%	1.3%	⑥
平均	0%	5.3%	8.5%	3.7%	13%	9.7%	20.8%	10.2%	51.5%	41.7%	16.4%	
順位	⑩	⑧	⑦	⑨	④	⑥	③	⑤	①	②		

表4. 年齢世代別・男女別からみた美術館・博物館の知名度の比率（%）

（「聞いたことがある」と回答した者）（N=176）

世代 N	20代男 11	20代女 26	30代男 18	30代女 27	40代男 14	40代女 24	50代男 12	50代女 13	60代男 21	60代女 10	平均 176	順位
館名称												
木田	18%	35%	33%	52%	71%	62%	75%	85%	95%	100%	62.6%	②
荒井	9%	19%	11%	22%	28%	38%	50%	31%	86%	80%	37.4%	③
西村	9%	27%	11%	7%	21%	21%	33%	31%	71%	60%	29.1%	④
小川原	0%	12%	6%	7%	21%	8%	25%	23%	57%	60%	21.9%	⑤
有島	36%	62%	56%	70%	78%	83%	92%	85%	100%	100%	76.2%	①
風土	18%	15%	6%	15%	14%	12%	0%	15%	19%	10%	12.4%	⑥
平均	15%	28.3%	20.5%	28.8%	38.8%	37.3%	45.8%	45.0%	71.3%	68.3%	39.9%	
順位	⑩	⑧	⑨	⑦	⑤	⑥	③	④	①	②		

表10. 年齢世代別・男女別からみた「倶知安風土館」に「行ったことがある」と回答した者の「入館回数」の比率（%）（N=176）

世代	20代男	20代女	30代男	30代女	40代男	40代女	50代男	50代女	60代男	60代女	平均
N	11	26	18	27	14	24	12	13	21	10	176
0回	100%	92%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	95%	100%	98.7%
1回	0%	4%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0.4%
2回	0%	4%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0.4%
3回	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	5%	0%	0.5%
計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

表11. 年齢世代別・男女別からみた「アウトドア活動経験」が「ある」と回答した者の比率（%）（N=176）

世代	20代男	20代女	30代男	30代女	40代男	40代女	50代男	50代女	60代男	60代女	平均	順位
N	11	26	18	27	14	24	12	13	21	10	176	
登山	18%	23%	33%	22%	14%	17%	50%	23%	38%	40%	28.0%	②
トレッキング	0%	4%	17%	7%	28%	8%	8%	8%	19%	20%	12.0%	③
カヌー&カヤック	0%	4%	6%	15%	0%	4%	0%	0%	5%	0%	3.0%	⑩
ラフティング	0%	8%	6%	22%	0%	12%	0%	8%	0%	10%	7.2%	⑦
ダッキー	0%	0%	6%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0.6%	⑭
フィッシング	0%	0%	6%	0%	7%	0%	0%	0%	14%	10%	4.0%	⑧
乗馬・ホーストレッキング	9%	8%	0%	4%	0%	12%	0%	0%	10%	0%	4.0%	⑧
マウンテンバイク	0%	0%	0%	7%	0%	4%	0%	0%	0%	0%	1.0%	⑪
熱気球	0%	0%	6%	4%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1.0%	⑪
パラグライダー	0%	0%	6%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1.0%	⑪
パークゴルフ	0%	15%	11%	11%	21%	4%	8%	0%	14%	10%	9.0%	⑥
スキー	64%	54%	67%	59%	50%	62%	67%	38%	67%	50%	58.0%	①
山菜採り	0%	15%	11%	4%	0%	12%	0%	0%	24%	40%	11.0%	④
ゴルフ	0%	4%	0%	7%	14%	12%	25%	0%	24%	10%	10.0%	⑤
平均	6%	10%	12%	12%	10%	10%	11%	6%	15%	14%	10.6%	
順位	⑨	⑥	③	③	⑥	⑥	⑤	⑨	①	②		

世代	20代男	20代女	30代男	30代女	40代男	40代女	50代男	50代女	60代男	60代女	平均
2回	0%	0%	0%	7%	7%	0%	0%	0%	5%	0%	1.9%
3回	0%	0%	6%	0%	7%	4%	0%	0%	0%	0%	1.7%
4回	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0.0%
10回	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	5%	0%	0.5%
計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

表15. 年齢世代別・男女別からみた「この地域（羊蹄山・ニセコエリア）で宿泊経験がある」と回答した者の比率（%）（N=176）

世代	20代男	20代女	30代男	30代女	40代男	40代女	50代男	50代女	60代男	60代女	平均
N	11	26	18	27	14	24	12	13	21	10	176
宿泊経験あり	45%	81%	100%	85%	64%	83%	83%	85%	90%	100%	82%
順位	⑩	⑧	①	④	⑨	⑥	⑥	④	③	①	

注. この調査で「宿泊先」として設定した項目は、「ホテル」「旅館」「ペンション」「別荘（貸し別荘）」「テント泊」「車中泊（キャンピングカーなどを含む）」の6項目であった。

表16. 年齢世代別・男女別からみた「この地域（羊蹄山・ニセコエリア）で宿泊した経験がある」と回答した者の「宿泊回数」（比率%）（N=176）

世代	20代男	20代女	30代男	30代女	40代男	40代女	50代男	50代女	60代男	60代女	平均	順位
N	11	26	18	27	14	24	12	13	21	10	176	
0回	55%	19%	0%	15%	36%	17%	17%	15%	10%	0%	18.4%	
1回	9%	19%	11%	22%	22%	17%	0%	15%	5%	10%	13.0%	③
2回	9%	26%	16%	18%	0%	21%	17%	15%	10%	20%	15.2%	②
3回	9%	12%	16%	15%	0%	5%	25%	8%	14%	20%	12.4%	④
4回	9%	8%	6%	4%	0%	8%	0%	8%	5%	0%	4.8%	⑦
5回	9%	4%	33%	11%	14%	12%	17%	39%	28%	20%	18.7%	①
6回	0%	4%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	20%	2.4%	⑧
7回	0%	0%	0%	0%	0%	0%	8%	0%	0%	0%	0.8%	⑨
8回	0%	0%	6%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0.6%	⑩
9回	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0.0%	
10回	0%	4%	6%	11%	14%	8%	8%	0%	14%	10%	7.5%	⑤
11回以上	0%	4%	6%	4%	14%	12%	8%	0%	14%	0%	6.2%	⑥
計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	

注. 「11回以上」には、11回から40回までの幅のある回答があったが、それをまとめて合計宿泊回数「11回以上」と表記した。

(4) 予備調査結果の若干の考察

①この地域の6美術・文学・博物館の名称の知名度と実際に「行ったことがある」と回答した比率の順位は一致している。第1位から第6位までの順位は次の通りであった。「有島記念館(文学館)」⇒「木田金次郎美術館」⇒「荒井記念美術館」⇒「西村計雄記念美術館」⇒「小川原脩記念美術館」⇒「倶知安風土館(博物館)」であった。設置年度の新旧の影響も無いとは言えないが、新しくても魅力があれば知名度も来館も増えるであろう。

また、「風土館」を除いた5館については、作家の知名度との関係もあるかもしれないが、「木田」は「小川原」よりもローカル色濃厚な作家であることから考えても、この知名度・来館者数の関係は、作家の人間性に由来しているのではないか。もちろん「木田」は、「有島武郎」の文学作品との関連からメジャーになり得る要素は否定できないが、「小川原脩」の太平洋戦争で当時の日本軍部に積極的に荷担した責任及びそのことに触れた展示がなされていないことなどを併せて考えると同郷の画家「西村計雄」や北海道倶知安高等学校に勤務していた画家「香月泰男」とは好対照である。かろうじて、2006年8月朝日新聞北海道版で旭川支局の記者がシリーズで「小川原脩」と戦争荷担の記事を掲載していたことが目につく。倶知安町民の賛否がほぼ等分された中での設置・開館であったからこのことは注視せざるを得ない。倶知安町には「木田」と同様にローカル色は強いが頑強にこの風土の中で今なお制作を続けている油彩画家が存在するわけでもあり、「小川原脩」の政治力の影に消されてしまっている作家たちが存在しているのである。上記知名度と、入館者との関係は誠に興味深い結果となった。

なお、本研究におけるワークショップを倶知安町の「小川原脩記念美術館」と「倶知安風土館(博物館)」他を中心に展開することにした根拠は、地域共同事業として地域の元気創造のために寄与するということから妥当な選択であつとも言える。両館の知名度と入館者(本研究に関係した者は打ち合わせを含めてすべてが入館料を支払っているから)が、ほんの少しこの研究によって増大したと考えている。

②次に知名度と実際に入館したかの差の大きいことを問題にしたい。知名度第1位の「有島記念館」(76.2%)の実際の入館率は33.6%、知名度第2位の「木田美術館」(62.6%)の入館率26.7%、他館も含めて指摘できることは従来の展示、催事方法を大胆に転換することによって、この知名度と入館者の差を縮小できる希望があることを物語っている。世界に抜ける地域発という発想の転換がどうしてもこの地には必要だと考えられる。

③また、年齢世代別にみる時、中高年層が若年層を知名度と入館者数において圧倒しているということである。入館者数は20歳代男性が0%、30歳代女性が3.7%と表3.をみれば、男女の性別は問わず20歳代から30歳代対策をしっかりと取らなければならないのではないかと。20歳代から30歳代は美術館や博物館には向いていなくて、40歳代は子育てに忙しく金が大変で、50歳代から60歳代になってやっとゆとりができて、美術館・博物館の対象者なのだという関係者の発想が仮に存在するとすればそれは文化の、感性の貧困を是認する考え方につながっているとされる。20歳代から40歳代をも引きつけるほどの魅力が欠けているとしか言わざるを得ない。

旭川市立動物園の例を挙げるまでも無いことと思われる。動物園は、従来は子どもと子育て中の世代だけが主たる入館対象者であったようだが、今や若者のデートコースにもなっているし中高年層、高齢者層、障害者層まであらゆる世代が入館しているわけで、発想の大転換が必要である。地元だけでは無く、産学官の連携が必要である。「ミュージアムロード」は、地域のものであると同時に、北海道の、日本の、世界の財産なのである。知床観光をみれば良い。

④「ミュージアムロード」の知名度も上記②③で触れたように20歳代から30歳代対策が必要である。設置者、設置主体を越えた地域広域連携が必要である。それぞれの町財政が国や北海道の失政から相当に苦しんでいるので、いわゆる「ハコもの」をたくさん抱えている町ではもはや、わが町だけでという発想は成立しないのではないか。既に、廃止されたり、閉館に追い込まれている真狩村や留寿都村、喜茂別町も含めて地域広域連携の「ミュージアムロード」観を強力に推進していく必要に迫られているのではないか。

⑤表5.から表10.までから指摘できることは、当然各館で懸命に取り組んでいることではあるが、1回限りの入館者ではなく、リピーターをいかにして呼び込むのかということに尽きるように思われる。この羊蹄山・ニセコエリア地区は、すぐれた自然が存在している。表11.から表14.を参照してほしいが、「アウトドア活動経験」者と「ミュージアムロード」入館者が結びついていないということなのである。従来の発想では、アウトドア活動経験者と美術館・博物館観覧者は異質な性格を持つ層であるから、この2つを結び付けることは不可能なのだという諦めがあったように思われる。しかし、この関係付けに固執すればするほど現状打破は困難である。この2つの異質とも思える性格を持つ層こそがこの地域の宝なのである。異質を同質に転換することこそ地域生き残り策なのだということに気づき、異質を結び付けることをやらなければならないだろう。

⑥「アウトドア活動経験」では、表11.から、意外な程「ラフティング」に代表されるような新種目が下位に位置して、決して悪いことで無いが「スキー」「登山」「トレッキング」が御三家になっているということである。20歳代と40歳代の落ち込みが気になる。一体、20歳代はどうしているのだろうかという疑問が沸き上がる。表12.表13.から「登山」「トレッキング」はリピーターの少なさが問題となる。20歳代男性はニセコエリアでのスキーの滑走にリピートしない原因は何なのか再度検討したいと考えている。本当に、ロングスキーは楽しく無いのだろうか。NACニセコアドベンチャーセンターROSS FINDLAY（ロス・フィンドレー、オーストラリア人）代表の新アウトドア活動はおおいに北海道人を刺激してくれたはずであるが、本調査からはその効用を読み取ることはできなかった。後に別項を起し触れるが、今日の倶知安町のオーストラリア人のスキーブームはロス・フィンドレー氏の口コミから拡がり、まったく倶知安町も予期していなかったオーストラリアバブルがこのニセコエリアに飛び火したのである。

⑦表15.表16.からは、20歳代男性・女性、40歳代男性・女性、50歳代男性の「宿泊経験」が少ないことが問題になるだろう。40歳代男性・女性は子育て真っ盛りで「宿泊」どころではない

のだろうか。また50歳代男性は働き過ぎなのだろうか。それでも20歳代男性の「宿泊経験あり」が45%で他の世代は60%を越えていることからすれば低率である。その原因は何か解明する必要がある。5回程度までの宿泊が一つの山で、1から3回程度までが多い。宿泊業はこの点、オーストラリア人の平均宿泊日数1週間から10日間とまでは文化や労働の形態が違う日本では、そこまでは無理としても、日本人の宿泊形態も1泊2日型から3～4日の滞在型への大転換を目指す必要があると思われる。

宿泊業は、羊蹄山・ニセコエリアの自然やアウトドア活動、またミュージアムロードについて宿泊者にどれだけ語ることができているのであろうか。ミュージアムロードのある羊蹄山・ニセコエリアにある町村の飲食店、土産店、衣料品店等々、すべてのあらゆる業種の関係者、大きさに言えばすべての老若男女、すべての町村民が、どれだけ地元の「語り部」になり得ているのだろうか。コーディネイターは存在しているのであろうか。町村民あげての学習活動こそが今後の羊蹄山・ニセコエリアの活性化のキーである。地域に依拠する本大学、本研究所の果たすべき役割は、このキーといかに関わるかということであると確信している。

2. 北海道で最も急激に変貌する可能性のある地域倶知安町を中心にしたニセコ・羊蹄山地区

(1) 隣接地区での明暗——地域に拡がる格差

①2005年4月～2006年3月までに倶知安町に来訪したオーストラリア人は7,700人で、外国人の約80%を占めている。前年度の約2倍で、ほとんどが冬のスキー客であった。倶知安町のニセコひらふ地区で新たにリゾート計画が進行している。倶知安町（札幌の建設会社資本）に設立された不動産会社「ラッド」とオーストラリアの投資会社「パブコックアンドブラウン（シドニー）」、オーストラリアの不動産開発会社「シティマークプロパティ（ブリスベン）」の3社が連携し総投資額約60億円のコンドミニアム（分譲マンション）を中核にした複合施設を建設する。2008年春には着工するという。既にひらふスキー場近くの土地約1万平方メートルを取得したという。「ラッド」の他に小規模なオーストラリア資本系の会社が乱立している。

②これとは別の情報によれば、この取得された土地に隣接する花園地区の約60ヘクタールの開発も目指されている。宿泊、ショッピング街、温泉、コンドミニアム、ゴルフ場、スキー場などを設置するという。総部屋数は2,000室、約8,000人を収容する総工費約600億円という巨大リゾート建設計画なのである（「日本ハーモニー・リゾート」会社はオーストラリアのメルボルンのリゾート会社が95%、東急不動産の子会社が5%出資した会社で、2004年7月に設立されたものである。本社は東京にある。この中には東急観光が開発したスキー場も、ゴルフ場もこの「日本ハーモニー・リゾート」会社に転売された）。2006年夏頃には着工する計画が発表されているが筆者らの調査ではまだ着工の様子はない。

③オーストラリア人のスキー人気は、上述、NACニセコアドベンチャーセンターのロス・フィンドレー代表の口コミが発端になったのであるが、このオーストラリアバブルは、いつまで持つのか。バブルのはじける時期は何時ごろになるのか。この虫食い状態の巨大開発の後始末

は本当にできるのでしょうか。地権者が多国籍にわたる関係からバブルがハジケタ後始末は非常に困難である。また失われた自然の復元ほど困難な事業はない。この降ってわいたような倶知安町のバブルに、ある意味で地元は踊らされている。

④北海道経済局がオーストラリア人スキー客の急増するニセコエリアでの観光による経済波及効果を推計したところ2005年度1年間で290億円にのぼり、2003年度の農業生産額163億円を越えたと発表している。調査は聞き取り調査で、対象は倶知安町、ニセコ町、蘭越町、京極町、喜茂別町、真狩村の6町村であった。やはり、ニセコ・羊蹄山地区でのオーストラリアバブルは本物のようである。ただしオーストラリアバブルの中心地は倶知安町であり、他の町村は取り残されそうな状態であることも見逃すことができない。筆者らの知る限りでは倶知安町関係者が積極的に仕掛けたわけでないのだがニセコの雪質がヨーロッパアルプスに酷似しているというのが理由のようである。このように北海道経済が低迷状態から抜け出せない、また北海道の市町村財政が極貧状態の中でのオーストラリアバブルなのであるから驚きである。しかし、これは、ニセコ・羊蹄山地区のすぐれた自然がもたらした賜物なのである。しかし、この賜物が地域の明暗を分けることになりそうなのである。

（2）倶知安町ニセコひらふ地区に隣接するニセコ町東山スキー場が完全撤退する

①日本の観光産業で最大の西武ホールディングス（西武HDと略記）は、国内有数のリゾート施設ニセコ東山地区から完全撤退することになった。ニセコ町東山スキー場、ニセコ町東山プリンスホテル、ニセコゴルフコース、ニセコ町東山プリンスホテルゴルフ場を売却することを決定したが、これらの施設は赤字続きで売却先の見通しは暗く閉鎖の可能性もある。これらの一連の施設は何れもニセコ町に位置する。オーストラリアバブルでスキー客が急増している「ひらふスキー場」も同じニセコアンヌプリにあり、「ひらふ」の隣接地なのである。北海道内の各スキー場における2005年11月から2006年5月までの利用客数は4,890万人で、10年前の約58%まで落ち込んでいる。

また、ニセコ町にある「ホテル日航アンヌプリ」の売却ないしは転売の噂もあるし（一部新聞報道された。現地担当者は否定しているが……）、蘭越町との境界にあるニセコ町の滞在型ホテル兼分譲型ホテル「グランステージ・ニセコ」は2005年から閉鎖に追い込まれ、ゴーストタウンになっている。「グランステージ・ニセコ」の前身は日本のバブル期の「リゾート法」により建設された高層ホテルであるが、建設されたが開業できずに約10年間放置されていた。

その後転売を繰り返し「グランステージ・ニセコ」となったものである。「グランステージ・ニセコ」の初期には「北海道美術館」という中国・朝鮮の陶磁器のコレクションが見られるという特徴もあった。いわば、トナムやサホロリゾートと同様の運命をたどっている。「グランステージ・ニセコ」の後期には転売により「北海道美術館」はホテル本体よりも早い時期に消滅してしまった。ニセコ町から一つの文化施設が消えてしまったことになる。（2006年12月、西武HDのニセコ東山プリンスホテル等の関連施設は米国資本の日本子会社に売却が決定した。こ

れまでの運営内容・方法が継続されるかは現時点では不明。)

②西武HDの完全撤退は、ニセコ町に地域経済と雇用問題への深刻な影響を投げかけている。オーストラリアバブルでスキー客が急増している倶知安町と西武HDの完全撤退で打撃を受けているニセコ町は隣接の町同士であるが明暗を分ける形となっている。ニセコ町には「有島記念館（文学館）」が、倶知安町には「小川原脩記念美術館」・「倶知安風土館（博物館）」がある。後志ミュージアムロードの重要施設である。本当に、日本人のスキー客はこの地区には来てくれないのだろうか。日本人スキー客の掘り起こしと同時にオーストラリア人、韓国人、中国人など東アジア圏の人々も視野に入れたアウトドア活動体験と文化・社会教育施設の利用促進、そして宿泊業界のものの考え方の再構築と基幹産業である地場産品の新たな付加価値づけなど「町民総語り部」になるためのコーディネイターの育成を真剣に考えるべきであろう。

倶知安町に降ってわいたようなオーストラリアバブルは一時的な効果はあるが中期的には極めて危ない。オーストラリアバブルがはじけても大丈夫なニセコ・羊蹄山地区の構築が必要であろう。

③北海道知事の勧告する市町村合併案は、倶知安町とニセコ町は合併予定の地域である。しかし、羊蹄山・ニセコエリアの町村合併協議会が一度決裂した経過もあり、地域再生は様々な難題に直面している。国から地方に委譲する税源措置も結論として地方が国に値切られた形になっており、都市部と地方の地域間格差の拡大と同時に、地方の中でも生き残れそうな地域とそうではない地域との間での地域間格差は益々増大している。

その典型を倶知安町とニセコ町での明暗に見ることができる。金がないとすれば、金を生み出す知恵が必要であり、そのためには町民あげでの学習が必要である。生涯学習で知恵を生み出し（協働）共用し合うことこそが今、必要となっている。そのような中でニセコ町は「有島記念館（文学館）」(名称も文学館の役割も残して)の機能を拡充して新たに「町民学習施設」と改称したことは注目に値する。その意味から、地域で生きる大学として、また地域共同研究を実践する本生涯学習研究所として果たすべき役割があるのではないだろうか。地域共同研究・実践が、大学が地域で生き残るためのキーの一つであることだけは間違いはない。

（3）北海道新幹線が札幌まで延伸されたら倶知安町は大変身する。

①北海道新幹線の新函館～新青森間の開業まで10年を切った。北海道新幹線開業に向けて函館市や北斗市ではあいついで高層ホテルの建設ラッシュが始まっている。経済効果は、観光業を中心に道内外で年間約360億円という試算も見られる。北海道新幹線は長期の経済不況から脱出できない北海道に地域振興の浮上をかけての強烈なインパクトをもたらすのではないかと思われる。

②札幌までの延伸を想定しての話だが、青函トンネルを走り抜けた新幹線は「木古内駅」に到着する。次が仮称「新函館駅」、そして仮称「新八雲駅」、「長万部駅」を通りついに「倶知安駅」に到着する。そして仮称「新小樽駅」、「札幌駅」にすべり込む。仮称のついていない駅名

は現在のJR駅を使用する。時速360Kmでの営業は東京～札幌間を4時間を切って運転されることになる。これなら空港までの時間と空港での手続き時間（待ち時間）を考えると飛行機と共存が可能になる。料金は、現在の「ひかり」に当てはめると東京～札幌間は約2万円という試算がある。正規の航空料金の3分の2程度になるからである。

札幌駅～倶知安駅までは電車に乗って7分から10分と言われるから倶知安町は札幌の通勤圏になってしまう。札幌のベットタウンになるであろう。つまり、札幌駅から本大学のある江別市文京台地区まで（JR大麻駅経由）の所要時間よりも短い時間で倶知安駅まで到達できてしまうわけである。ニセコ・羊蹄山地区の様子が大変貌を遂げることになる。人、金、物の流れが大きく変貌する。その時の美術館・文学館・博物館の在り方と見せ方、アウトドア活動の在り方と内容、宿泊施設の在り方とサービスそして自然との共生は再構築されなければならないだろう。オーストラリアバブルが北海道新幹線の札幌延伸まで持続するかは不透明であるが倶知安町は変わらざるを得ないのである。これが「明」の部分である。

③当然、北海道新幹線の札幌延伸には「暗」の部分がある。JR函館線の小樽～長万部間が廃線になる可能性も出てくる。旧小樽～倶知安間の線路がなくなるのである。例えば余市町はどうなる。仁木町は、然別・銀山は、共和町はどうなるのだろうか。小泉政権下の規制改革によってバスの代行運転も路線の認可は受けるが、運行数はバス会社の裁量にゆだねられるのである。北海道内各地でバス運行もなくなるか、あっても1日に2往復とか……、地域住民の足は確保されにくくなってきている。これも地域間格差の一つである。ニセコ・羊蹄山地区をみても、マイカーがなければ、現在でも京極町、喜茂別町、留寿都町、真狩村、ニセコ町、蘭越町、黒松内町、共和町、岩内町には行きにくい。余市町、ニセコ町、岩内町（途中下車で共和町）には、札幌または小樽から都市間バスが運行されているが限定された運行数で不便だ。JRの在来線の存続問題が地域振興と大きくかかわってくる。「ふるさと銀河線」の苦い経験を学習するべきである。

④余市町の「ニッカウイスキー工場」は、工場全体が大博物館になっているが夏場だけの集客に推移している。余市町の生涯学習振興と「ニッカウイスキー工場大博物館」と大学が産学官の連携で生涯学習計画が何か可能なのではないか。「ニッカウイスキー工場大博物館」の広大なキャンパスと各種建物と施設は様々なワークショップにも活用できるのではないか。大学として、本生涯学習研究所として連携の可能性を具体的に検討するべきであろう。

また国道393号線が2007年春開通し赤井川村と倶知安町が直結される。定山溪温泉、札幌国際スキー場（2005年冬期間だけキロロスキー場と直結されている）、朝里川温泉、赤井川村（キロロスキーリゾート）、倶知安町、ニセコ・羊蹄山地区へと行ける新しいルートととして開通される。将来、定山溪温泉、札幌国際スキー場、キロロスキーリゾート、ニセコ・羊蹄山地区が直結されるという計画もある。小樽市内も余市町内を通らなくても倶知安町、ニセコ・羊蹄山地区に入れるのである。ここでも明暗を分けることになる。なお、札幌自動車道は、片側1車線で小樽市から余市町まで、2019年完成で延伸されるが遅すぎる。

⑤札幌からの小樽観光はJR線を使用した方が所要時間的にも効率的である。しかし、北海道新幹線の「仮称新小樽駅」は、天狗山の南、定山溪側に設置予定である。現在の小樽駅とは訣別した新しい町並みを整備することになる。小樽観光もまた変化せざるを得なくなりそうである。高齢化率の高い町であり、財政が極めて弱い町が現在の小樽市である。余市とともに小樽もまた北海道新幹線の波に飲み込まれるであろう。その時、明治開拓以来の北海道経済の中心地小樽の歴史的建造物や町並みはどのように保存、活用されるのであろうか。ニシン漁に関する余市町の歴史的建造物はどうになってしまうのであろうか。

⑥岩内町の「荒井記念美術館」は、既に冬期間は事実上の閉館に追い込まれていて、同系列の資本で経営されている「岩内高原ホテル」の宿泊客のリクエストで観覧させることもあるという状態になっている。「荒井記念美術館」内には完備された小劇場（ホール）もあるので、これらの財産を再び利用しない手はない。また、「木田金次郎美術館」も、一部新聞報道が先行し冬期間閉鎖の話が独り歩きして（町役場関係者の話から広まってしまった）、現在関係者は閉鎖しないよう署名活動を展開中である。岩内町もまた、苦しんでいる。

3. 大変貌の可能性、光と陰が織りなす倶知安町は、地域研究としても魅力満載

本研究の副題「後志地方におけるワークショップによる地域共同活動の試み」における「後志地方」を先ずもって倶知安町にしばらく込んだ理由については、上述概観してきたことで理解できると思われる。倶知安町は大変貌の可能性を秘めている。しかし光と陰が織りなすことは間違いがないものと考えられる。倶知安町は地域研究としても魅力満載の地域なのである。今後、本研究所の地域研究が軌道に乗った場合には、「後志地方」の他の町村にも視点を動かしてみたい。「なぜ、倶知安町を選んだのですか」とは倶知安町長の質問であった。本研究開始の可能性の開拓にあたって倶知安町長、同町教育長、同町議会議員、その他の皆さんと面談したときのことであった。今後の地域振興の一助としての子どもと大人、親子の参加を念じてのワークショップを試みた次第である。

V. 文献

1. 「道民カレッジ」事務局.2005.「道民カレッジ」連携講座の地域管内別参加団体・講座数 (H17.2.22現在).
2. 朝日新聞.2005.朝日新聞朝刊.2005年8月12日.13版.28面.
3. 朝日新聞.2006.朝日新聞夕刊.2006年1月20日.3版.8面.
4. 朝日新聞.2006.朝日新聞朝刊.2006年5月20日.13版.28面.
5. 朝日新聞.2006.朝日新聞朝刊.2006年5月20日.13版.29面.
6. 朝日新聞.2006.朝日新聞朝刊.2006年6月16日.13版.34面.
7. 朝日新聞.2006.朝日新聞朝刊.2006年8月9日.13版.28面.
8. 朝日新聞.2006.朝日新聞朝刊.2006年8月30日.13版.29面.

謝辞

ご多忙の中を倶知安町として快く本地域研究を受け入れてくださいました。関係者の皆様からお礼と感謝を申し上げます。特に、町長様、教育長様、教育委員会の皆様、社会教育課長様、社会教育課主幹様、小川原記念美術館の皆様、倶知安風土館の皆様、文化福祉センターの皆様、絵本館関係者の皆様、総合体育館関係の皆様、各学校長および関係者の皆様、喫茶店「なぎさ」の店主様そして、倶知安町議会議員関係者の皆様には大変なご理解とご協力を賜りました。また、お名前は記しませんが倶知安町並びに周辺の町村の皆様にもお世話になりました。記して感謝申し上げます。最後にワークショップに参加賜りましたすべての皆様、すべての倶知安町民の皆様に感謝とお礼を申し上げ敬意を表します。

(本研究は、平成17年度 浅井学園大学特別研究費の交付を受けて、浅井学園大学生涯学習研究所が機関研究として実施したものである。)

資料 予備調査用紙（全2頁もの）

平成17年7月5日

教員・職員 各位

生涯学習研究所所長
藤原 等

調査研究に関するご依頼（お願い）

本研究所では、今年度、特別研究「大学と地域で創る生涯学習活動の研究——後志地方におけるワークショップによる地域共同活動の試み——」を機関研究として単年度措置として取り組むことになりました。この場合の「後志地方」とは、倶知安町を中心とした後志中央部地方のことを考えています。

つきましてはご多忙中であるとは存じますが、後志中央部地方の事項について、その認知度について知りたく思い、アンケート調査をさせていただきたく、略儀ながらご依頼申し上げます。よろしくお願い申し上げます。ご協力いただける場合は次の要領でご回答をお願いいたします。

-----この用紙のままた提出していただく-----

1. 無記名です（回答者のお名前は要りません）。

2. よろしければ○印をおつけください。

(1) 男 女

(2) 20代 30代 40代 50代 60代 70代

3. よろしければ○印又は数字を記入してください。

(1) 「しりべしミュージアムロード」の名前を聞いたことがありますか。

ある ない

(2) 「木田金次郎美術館」の名前を聞いたことがありますか。 ある ない

(3) 「木田金次郎美術館」に行ったことがありますか。 ある ない

(4) 何回（くらい）「木田金次郎美術館」に行かれましたか。 （ 回くらい）

(5) 「荒井記念美術館」の名前を聞いたことがありますか。 ある ない

(6) 「荒井記念美術館」に行ったことがありますか。 ある ない

(7) 何回（くらい）「荒井記念美術館」に行かれましたか。 （ 回くらい）

(8) 「西村計雄記念美術館」の名前を聞いたことがありますか。 ある ない

(9) 「西村計雄記念美術館」に行ったことがありますか。 ある ない

(10) 何回（くらい）「西村計雄記念美術館」に行かれましたか。 （ 回くらい）

(11) 「小川原脩記念美術館」の名前を聞いたことがありますか。 ある ない

(12) 「小川原脩記念美術館」に行ったことがありますか。 ある ない

(13) 何回（くらい）「小川原脩記念美術館」に行かれましたか。 （ 回くらい）

(14) 「有島記念館」の名前を聞いたことがありますか。 ある ない

(15) 「有島記念館」に行ったことがありますか。 ある ない

(16) 何回（くらい）「有島記念館」に行かれましたか。 （ 回くらい）

(17) 「倶知安風土館」の名前を聞いたことがありますか。 ある ない

(18) 「倶知安風土館」に行ったことがありますか。 ある ない

(19) 何回（くらい）「倶知安風土館」に行かれましたか。 （ 回くらい）

4. よろしければ○印又は数字を記入してください。

羊蹄山・ニセコ連山・尻別川を中心としたアウトドア体験についてお聞きします。

